

[講演会抄録]

2012年度連続研究講座： グローバルゼーション下の若者 第3回「都市化と若者」

2012年6月14日

マリ・クリスティーヌ (国連人間居住計画 (HABITAT) 親善大使)

皆さまこんにちは。マリ・クリスティーヌと申します。よろしく願います。今日は「都市化と若者」というテーマでお話をさせていただきます。最初に自己紹介をさせていただきます。

私の父はイタリア系のアメリカ人、そして母が日本人です。日本で生まれ、4歳まで暮らし、4歳のときから父の仕事の関係でたくさんの国に住みました。ドイツに4年、アメリカに1年、イランに小学校の5年生から4年、その後タイに2年行き、日本に戻ってきました。小学校から中学校、そして高校にかけて何度も転校しました。そのおかげで、今でも各国に友達が大勢います。私が海外に出かける時に連絡すると友人たちが待っていてくれるのがとても嬉しいです。皆様方は今、大学で勉強されていますが、友人はたくさん作るということがとても大事だと思います。自分の人生の中で、だんだん大人になり、そして歳をとってくると友達がたくさんいて良かった、と思う時期がきっと来るのではないかと思います。

私は日本で生活していた4歳までは日本語を話していましたが、ドイツに行って日本語をすっかり忘れてしまい、ドイツ語と英語を覚えました。その後アメリカの学校でフランス語が加わって、イランに行きペルシャ語ができるようになりました。またタイではタイ語も勉強しました。父がイタリア系のアメリカ人なので、子どものときから祖父母とはイタ

リア語でないとコミュニケーションができなかったので、17歳までは6か国語を使い分けていました。日本に帰ってきて日本語をまた覚え直し7ヶ国語ができるようになりました。

私が大学に留学したのは17歳の時です。アメリカのインターナショナルスクールの場合は、勉強して単位を取れば取るほど、早くに卒業できます。私は勉強がとても嫌いだった上に転校が多かったので、父がいつも家庭教師をつけました。学校から帰ると家庭教師が待っているのが嫌々ながらも勉強をしましたが、そのおかげで早く高校を卒業することができました。17歳のときに上智大学に留学し、そこから本格的に日本語を勉強し始めたのです。

私が大学に行き始めた頃というのは、まだ外国人があまり日本にいない、グローバルゼーションとか国際交流とか異文化理解とか、そういうことも全くなく、私のように混血であることがあまり喜ばれない時代でした。「あの人はハーフだ」とよく言われたものです。私はハーフという言葉は好きではありません。二つの文化の半分ずつみたいなのがするので「私はハーフじゃありません。私はダブルなのです」と言うことにしています。私は日本人であり、そして、イタリア系アメリカ人でもあり、そして私自身は、地球人である、地球市民であるというように自分自身を認識しています。

混血であるために目立つので、上智大学の門のところで「モデルやりませんか、歌手になりませんか」と言われてスカウトから何度も声をかけられ、歌手というのはオペラのことだと思ってスカウトを受け、芸能界に入りました。キングレコードというところに連れて行かれたら、オペラではなくポピュラーソングだったのですが、歌の勉強をしてレコードデビューをし、大学1年生の時にアイドル歌手になりました。なかなか授業を受けられない状況で単位が足りなくなり、留年を繰り返し7年かけてやっと大学を卒業することができたのです。

7ヶ国語できるということが、どういうわけか一人歩きしはじめて、色々なテレビ番組の司会をよくバイリンガルでやらせていただきました。その後、クラシック音楽の番組の司会や、世界旅行の番組などにも出させていただきました。私自身は順風満帆で卒業したわけではなかったのですが、これまでの様々な経験が今の仕事に大きく役立っています。

私は色々な国で暮らしてきたとお話しましたが、私が子どもの頃から生活していた国々は、その頃決して裕福な国ではありませんでした。ドイツに1960年代に住みましたが、第二次世界大戦の後には日本と同じように敗戦国として復興の最中でした。国民の勤勉さのおかげで高度経済成長の真っただ中ではありましたが人々はまだ裕福ではなかったです。イランは、私が住んでいた頃は今のアフリカのように、裕福な方々と、貧しい方との貧富の差がとても大きい状況でした。私がよく覚えているのは、子どもの頃に父と車に乗っていると窓に手を突っ込んできてお金ちょうだいというベガー（物乞い）がたくさんいました。私は子どもでしたから、びっくりしてしまいました。父は必ずお金を少しあげるのので、次から次へと子どもが車に寄ってきてしまいました。たくさん子どもたちが手を出すのを見て私は何だかとても怖いと思いました。それと同時に「何故、私はお腹いっぱい食べられるのに、ここの子どもたちは物乞いしなくてはならないのか？」と、子どもながらに理不尽さを感じました。このような環境で育ったので、どうすればみんなが幸せになれるのかというようなことを小さいときから、なんとなく課題として考えてきました。これが、現在国際交流・国際協力にかかわっている私の原点です。

では、本日の本題に入らせていただきます。

皆様、国連ハビタットはご存知ですか？日本ではあまり知られていない組織ですが、「ハビタット」とはラテン語で生息地、居住地を意味する

言葉です。国連ハビタットの日本名は「国連人間居住計画」といい、すべての人が安全に安心して暮らすことができるように“まちづくり”に関して活動をしている国連機関です。

国連ハビタットの考える人間居住、つまり「まちづくり」は経済基盤やインフラ整備がきちんと整っていて、人々が生き生きと暮らせるという状況です。生きる、生活するということは、全部一本の糸で繋がっています。上下水道が整備されているか、電気の供給やゴミの処理がなされているか、雇用の場があるか、初等教育や医療の恩恵が誰でも受けられるか、学校や仕事場、病院などに行くための交通機関は整っているかどうか。さらにもっと重要なのがそれを支える法律が整備され、人権が守られているか。それらのことすべてを総合して考え、不足しているところを補うのが国連ハビタットの仕事です。

1978年10月に設立され、本部はケニアのナイロビにあります。皆様が良くご存じのユニセフなどが1945年の第二次世界大戦のすぐ後に作られたのに比べて比較的新しい組織です。終戦後の高度経済成長の時代が終わった頃から、世界中の様々な国で「都市化」の課題が顕著になってきました。世界各国で大都市に人口が集中しています。急激な都市化や都市の不規則な発展、急激な巨大都市の増加などが人間の生活環境に大きな影響を与えています。人口増加や地球の温暖化等による自然環境の悪化などの理由で農作物が採れず食べられなくなり、現金収入を求めて都市に移り住む人々が増えているのです。

1970年には世界人口の37パーセントが都市で暮らしていましたが、2000年には全人口の47パーセントとなり、2020年には世界人口の半数以上56パーセントが都市で生活すると予測されています。2050年までには世界人口の3分の2以上の70パーセントの人が都市に暮らすであろうといわれています。世界の都市人口は毎年6000万人ずつ増加しているのです。この傾向はアジアやアフリカで特に顕著です。

都市に暮らすことはすべて悪いというわけではありません。都市には可能性があり、多くの人々が都市の暮らしの中で便利さや豊かさを享受しながら暮らしています。都市部に住む子どもと農村部に住む子どもを比較した場合、都市部の子どもの方が平均して乳幼児期を生存する確率が高く、教育の機会にも恵まれています。しかし今日、アジアやアフリカなどの途上国と言われている国では全人口の半数近くが都市にあるスラムで暮らし、水道、衛生施設（トイレ）、教育、保健などのサービスを受けることができないのが現状です。都市に住む人々の貧富の差は農村部に住む人々との貧富の差と格段に違い、格差と排除を生みだしているということが大きな問題なのです。

これまで住んでいた農村などから都会に出てきても、もともと何か手に技術があるわけではなく、教育を受けていないなどの理由からすぐに仕事に就くことができないために、貧困に陥ってしまいます。自分たちの言語を使っているために共通語が話せず、言葉が通じないようなこともあります。

私たちの住む日本でも都市に人が集まってくるという現象が起きていることは皆様もご存じの通りです。しかし人口増加の速度はそんなに早くはありません。緩やかな人口増加なので、水道もトイレもなく電気もガスもないというような公共サービスを受けられない人などはほとんどいません。まだ十分ではないとの声もありますが社会保障も確立されていますから人々はむしろ都市の恩恵を受けながら暮らしていく場合が多くて、生活環境もあまりひどい状況ではなく安定しています。

それに引き換え途上国ではここ数年に急激に都市化しています。もともと国に経済的なゆとりがないところで、都市に急激に人々が集中するので「まち」としての機能の整備が追い付かず家も足りません。経済的にゆとりがない人々はゴミの山や線路わき、崖の斜面などのような場所で水道やトイレなどの衛生施設、ごみ処理などの基本的なサービスも何

もないようなところで暮らし始めます。このような場所はスラムと呼ばれ、危険であり健康を害することもあります。不衛生で不安定な生活の中では都市犯罪や暴力、環境破壊、汚染などにも繋がります。教育を受けられない子どもも多く、家庭内も安全ではないためストリートチルドレンも数多く存在します。学校に行くよりもお金を稼いで食べていくことの方が先決というような状況ですから、騙されて人身売買の被害者になったり、ドラッグなどに手を染めてしまうこともあります。貧困が貧困を呼ぶような劣悪な環境になっていくのです。

「slum」という言葉は19世紀にイギリスのロンドンで使われるようになったといわれています。仕事を求めて農村から都会に出てきた人たちが暮らす貧困地帯のことを言います。

国連ハビタットは以下に挙げる項目が一つ以上欠如しているところを「スラム」と定義しています。

- ① 改善された水へのアクセス
- ② 改善された衛生設備（トイレ）へのアクセス
- ③ 住み続けられる保証
- ④ 住宅の耐久性
- ⑤ 十分な生活空間

① 改善された水へのアクセス

日本ではほとんどの地域で水道の蛇口をひねれば水が飲めます。現在はペットボトルの飲料水が普及していますので、絶対に水道の水は飲まないという人もいますが日本は本当に水に恵まれたところではあります。人間の生活には飲料水は絶対に欠かせないものですが、世界中では約11億人の人が安全な水を手に入れることができません。世界人口の6人に一人が水へのアクセスができないのです。アフリカなどでは安全な水を確保するために何時間もか



けて水を汲みに行かなければならないところがあります。女性の仕事である場合が多く、水汲みのために時間を費やし、学校に行っても勉強することができないような場合もあります。水は重いので体に負担がかかり20歳くらいの女性が40歳くらいにも見えるようなことがあります。本当に重労働です。また、安全な水を手に入れることができないために毎日約6000人の子どもが下痢など水関係の病気で命を落としているという現状もあります。手間や時間をかけず、誰でもが安価で安全な飲料水を手に入れられるようにならなければなりません。

② 改善された衛生設備（トイレ）へのアクセス

現在世界中でトイレにアクセスできない人の数は26億人で、世界人口の2.6人に一人がトイレにアクセスできないこととなります。安全な水を手に入れられない人の倍以上の人がトイレにアクセスできません。そのうちの72パーセントがアジアに住んでいる

とされています。ケニアの首都ナイロビには100万人が住んでいるキベラというスラムがあります。大きなスラムです。ここを訪れたときに「フライングトイレ」というものに出くわしました。トイレが無いのでビニールの袋に用を足し、それを結んでポイっと投げ捨てるのです。ところかまわず捨てるので、道路を歩いているときに「フライングトイレ」に注意するように言われて驚きました。トイレが無いので斜面の上に住んでいる人が家の周りで用を足すと、それが斜面を流って下の方に流れていき、下のほうに住んでいる人の家の周りに溜まっているというのを目にしました。草原などの外で用を足したり、この写真のようなトイレでは皆様方のような年頃の女性が襲われたり、暴行、レイプなどの被害に遭うこともあります。トイレを我慢し続けて病気になることもあります。プライバシーを守ることができて衛生的であるトイレというのは人間の生活にはなくてはならないものです。



③ 住み続けられる保証

勝手に人の土地や家に住んだりしてはならないことは誰でもわかっていることですが、アジアやアフリカの貧困地域では住宅に困っている人々が線路脇や沼の上、ゴミ捨て場のすぐそばなど、本来は人間が住むべき場所ではないところに不法にその場しのぎの住居を建てて住んでいる人々が多いのが現状です。このような人のことを英語ではスクワッターと言います。不法な住居は質が悪く、過密で不衛生な場合が多いため、感染症などの病気の発生率が高く健康にもよくありません。不公平な政策や管理規制が存在していることもあります。これらの人々の住宅は時として突然の立ち退き命令があり、強制退去をさせられることもあります。警告も補償金もなく立ち退きを要求されることが多いのですが、これらの人々はすでにそのそばに仕事の間や経済活動の間を持っていることが多いので、立ち退きとともに暮らしていけなくなるような状況に陥ります。このようなことがないように人々の居住に関する権利が守られるようにしていかなければなりません。国連ハビタットは1996年以来「安定した保有」に関するキャンペーンを実施しており、スラムなどに対する不法な強制立ち退きを無くし、一定の土地に安心して住み続けられる権利を守るための活動を続けています。

④ 住宅の耐久性

これまでスラムのことをお話してきたので、すでにお分かりと思いますが、トタンや廃材など、時には木の葉や厚紙、ビニール袋などを利用して建設されたバラックのような建物には耐久性はなく、暑さ、寒さに対する防御は皆無であり、洪水や地震などの自然災害にもとてもリスクが高い状態です。スコールのように一時に多量の雨が降ると家の中が水浸しになることも頻繁に起こり

ます。ゴミ捨て場のそばなどの家では洪水の度にゴミが家の中に入り込み不衛生きまわりないような状態になり、感染症が急速に蔓延します。脆弱な建物は災害に対して大きなリスクがあります。スラムなどは海面より低い土地に形成されていることも多く、排水設備などはほとんど皆無に等しいので被害が広がります。災害などのリスクが少なく、危険のない土地に永続的に住み続けることができるようにしていかなければなりません。

⑤ 十分な生活空間

十分な生活空間とはどのような広さを言うのでしょうか？スラムには一部屋だけの家が多いのですが、その家に数家族が住んでいるということがあります。部屋を分け合う場合もありますし、昼間外に出ていて夜は寝る家族と、昼は寝ていて夜は外に出て行く家族が家を共有しているような場合もあります。広さがわずかたたみ5畳くらいの小屋に2家族14人が暮らしているといったケースもあります。雨の日には寝ることもできずに水の中に一晚中立っていなければならないというような場合もあります。このような家は過密に建てられているため、光がほとんど入らないような劣悪な状況です。不潔になりがちで雑菌も多く健康に害を及ぼします。病気になるとその治療費がまた生活の負担になります。家族を支えるために働かなくてはならない子どもたちは教育を受ける機会も少なくなり、おとなになっても低賃金の仕事にしか就けなくなります。貧困の悪循環です。家庭内に争いが増えるために、家族と暮らすことが苦痛になり、ストリートで暮らす子どもたちが増えることに繋がります。

国連ハビタットは1996年にイスタンブールで開催した会議で人間居住に関する宣言「ハビタットアジェンダ」を採択し、「すべての人に対する適切な住宅」および「都市化する世界における

人間居住の持続可能な開発」をすすめるためのキャンペーンを始めています。現在の状態で都市化が進み、状況が何も改善されないと、スラムに住む人々の数は毎年2700万人ずつ増え、2020年までに14億人に達するようになると見られています。国連のミレニアム開発目標では2020年までに少なくとも1億人のスラム居住者の生活環境を大きく改善するという目標が立てられていますが、1億人という数字は現在スラムに住む人々や今後増加するであろうと試算されている人数に比較して、本当にごくわずかであるとしか言いようがないと思います。今こそ、この課題に対して私たちが真剣に向き合わなければならないといえます。

ここまでお話ししてきたことで、都市化が人々に及ぼす影響については少し理解をいただけたかと思います。もう少し詳しくこの都市化が子どもや若者にとってどのような課題があるかを考えてみたいと思います。

① 子どもの栄養

都市は本来なら食べ物も豊富にあり、都市に住む子どもたちの栄養状態はとても良いのですが、スラムに住む子どもたちの栄養失調率はそれ以外の地域の子どもの3～4倍に達するという調査結果があります。栄養不足は低体重、精神発達の遅れや感染症発症のリスクの高さなどに繋がります。またスラムにおける5歳未満の子どもの死亡率は他の地域の子どもの死亡率に比べて非常に高くなっています。死亡の主な原因は肺炎と下痢性の疾患です。安全な水と衛生設備（トイレ）の不足、不衛生な環境がこれらの病気を引き起こす要因となっています。

② ストリートチルドレン

現在世界中には1億人以上のストリートチルドレンがいると推定

されていますが、この数も都市化の進行に伴って増加しています。虐待、放置など、スラムの住民の家庭内の課題に加えて、貧困からの脱出を試みて家族を助けるために経済的、社会的機会を求めて自らストリートに出てくる子どもたちもいます。親を亡くすなど保護してくれるおとながいなくなった場合などもあります。都市というものは若者にとって非常に魅力的なものであり、出稼ぎに行く場であり、豊かになれるという夢や希望がかなえられると思われる場所です。しかし、現実決して甘くはないのです。

児童労働に関する調査では、世界中で児童労働に従事する子どもの数は2億1500万人と推定されています。この場合の「児童」というのは子どもの権利条約で定められている18歳未満の子どもをさします。そのうちの1億1500万人、日本の総人口が1億2800万人くらいですから、ほぼそれに近いくらいの子どものが人身売買などを含む危険な労働に従事しています。工場や農場などで1日中働かなければならないような状況の子どももいますし、スカベンジャーというゴミ拾い、路上での物乞い、花売りなど仕事は様々です。中には子どもが兵士になって戦争の場で働かされるというようなことも起きています。子どもですから戦場は当然ながら怖いので、ドラッグなどで怖さを麻痺させてから戦場に連れていかれるなどと信じられないことも起きています。皆様が外国に行った時など道路上やレストランで花を売っている子どもや物乞いをしている子どもに出会うことがあると思いますが、子どもがそのようなことをしている裏には搾取するおとなが潜んでいる場合が多く、子どもらは色々な訓練させられ、売り上げが悪いと虐待を受けるというような状況になります。少しでも多くのお金を稼ぐために小さな子どもにその子の身長のお半分くらいの赤ちゃんを背負わせて哀れさを装わせたり、中には手や足に傷をつけられて障害を持っている子どもとして物乞い

をさせられていることもあります。NGO などでは物乞いをしている子どもにお金をあげないよと言っているのを聞いたことがあるかと思いますが、お金をあげてはならない理由は渡したお金がその子の手に残るのではなく子どもたちを操っているおとなに搾取されてそのまま取り上げられていることが多いからです。子どもたちを搾取するようなベガー産業をこれ以上上げないようにしなければならないと考えているからです。また、ストリートで生活する子どもは性的な虐待を受ける危険性も高くなります。HIV感染のリスクなども高くなります。

③ 若者

では都市化が若者に与える影響について考えると、雇用の問題が一番大きいと思います。子どものころから教育をしっかりと受けてこなかったために仕事に就くことができない状況に加えて、途上国では都市における若者が増えているために労働市場の逼迫の問題が加わってこの課題はますます困難を極めます。仮に仕事に就けたとしても賃金が不安定であったり、健康を害するような危険な仕事に就かざるを得なかったり、簡単にリストラにあうなどということもあります。皆様もこれから就職活動をして社会に出ていかれると思いますが、働きたいのに働く場所がないということの大変さは理解していただけないのではないかと思います。つい先日、ILOは世界の若年層（15歳～24歳）の平均失業率が12.7パーセントに達すると予測しました。景気が回復しない中での雇用の課題は先進国でもかなり深刻な状況です。途上国の都市の中では若者の人口は増えていますが、身分証明書を持っていない人も多く、仕事に就くことが難しい人の割合はどうしても多くなります。なかなか思うような仕事に就くことができない状況が続くと、自分で自分の将来を切り開くことに希望が持てず、貧困と不公平が原因の欲求不満や鬱憤が暴力

や犯罪を生むという状況も起きてきます。強奪や恐喝、シンナーの乱用、薬物の売買などにかかわる若者が増加するのです。それが人身売買やHIV/AIDSの増加にもつながります。国連の調査によるとHIV感染率は農村部よりも都市部でリスクが高く、若者の中で特にHIVに感染する人々の中ではストリートチルドレン、薬物使用者、セックスワーカーなどがリスクが高いという結果が出ています。無防備な性交渉や薬物の注射などが原因となります。

都市化の問題というのは、単に都市が大きくなってインフラ整備をしなければならないという単純なものではなく、むしろ色々な内面的な問題をたくさん抱えています。

ここまでは一つの国の中で人々が移動し、都市が不規則に発展していくことの影響についてお話してきましたが、近年は国境を超えての都市化も大きな問題となっています。紛争地から国外避難民として他の国に移動する人々や、自分の国よりも隣の国が住みやすいように見えて不法に国境を越えて移動する人々もいます。タイ北部の町や東部の町に行った時に、隣国のミャンマーやラオス、カンボジアから仕事を求めて移動してきた人々と会いました。タイは近年経済発展が著しいうえ、長い間紛争とは無縁の国です。長い紛争後の復興期であるカンボジアや軍事政権下で抑圧が厳しいミャンマーなどに住んでいる人たちから見れば豊かで希望のあるところのように映るのかもしれませんが。国境と言っても山を越えたり、川を渡るだけです。人々は歩いて簡単に国境を超えることができます。ほとんどが不法入国です。しかし豊かな国に来てても国籍がないと仕事に就くことはできません。言葉の問題もあります。結局は国境近くか町の中のスラムに暮らすことになり、自分の国で暮らしていた時よりもっと劣悪な環境で暮らすことになる可能性が高いです。人身売買の被害者になることもあります。カンボジアの国境の

町には毎月のようにタイへ不法入国した人たちが1500人位強制送還されるところがあります。これらの人々を支援するNGOなどが、それぞれを家まで送り届けるのですが、結局また故郷を捨てて隣国に移り住むことを繰り返すようなことが多いようです。

国連ハビタットでは、スラムの改善事業を実施する時に、住民たちとの話し合いを通して「まちづくり」を行っています。国連ハビタットのスタッフはスラムの住民たちを集めて「自分たちはどのようなまちに住みたいか」をじっくりと話合うところから事業を始めます。上下水道、トイレ、道路、病院、学校、橋など自分たちのところに一番必要なものは何かを協議し、優先順位をつけていきます。病院が欲しいというところもあればトイレが必要だということもあります。地域の問題点をどう解決するかを話し合う回数を重ねる間に、住民たちの間に連帯感が生まれます。立ち退きを迫られている人々のためには政府との交渉も国連ハビタットの仕事です。自分たちが必要なものを絞り込むことができれば、それが実現できるように自治体との交渉や予算の組み立ても国連ハビタットがお手伝いしますが、主体となっているのは住民です。このように住民が参加し、主体的に動くことで人々の「自立」が始まります。搾取されることが多く、自尊心のようなものも失いつつあった人々に「自分たちもできるのだ」という意識を取り戻してもらうのです。そして自分たちの必要なものを住民参加で実際に作っていきます。そこには雇用も生まれます。このようにして作られたトイレをカンボジアで見ました。スラムの人々は自分たちのトイレをととても大切にしている、当番制で毎日掃除をしているそうです。実際にそのトイレはピカピカに光っていました。

「魚を与えるよりも魚の獲り方を教えよう」という言葉があります。ハビタットのプロジェクトはまさしくこの魚の獲り方を伝えていくこ

とで住民のエンパワメントを実現しています。自分たちが住んでいるところだからみんなで守っていこうという意識がまちを良くしていきます。

ここにプノンペンのスラムの改善例をお見せします。Beforeを見ていただくと改善前は常に泥水が溜まっており、ハエや蚊も多く感染症などにもリスクの高いところでした。国連ハビタットのスタッフが住民たちを集めて話し合いを重ねた結果、ここに橋を作ることにしました。行動計画を作成し、専門家による技術指導なども行います。プノンペン市との交渉や契約にも力を貸していきます。調印後はコミュニティの人々を雇用して事業を実施し、立派な橋を作りました。

プノンペンのスラム改善の例



BEFORE



AFTER

都市の貧困についての問題は、まず問題を把握することがすごく重要です。そしてスラムの暮らしや、その中で一生懸命に生きている人に対

しての理解を持つということも大事なことです。

ボランティアにも是非興味を持ってください。大きなことをしなければならぬではありません。ごみが落ちていたらちょっと拾ってみるとか、お母さんが大変だなと思ったら、皿洗いをお手伝いしてみるとか、おばあちゃんが1人で生活しているならば電話して「おばあちゃん元気？」とか声をかけるとか自分から外の何かに、少しだけエネルギー注ぐだけでも全然人生というか、自分の見え方って変わってくるのではないかなと思います。

本日は都市化の問題とスラムのお話をたくさんさせていただきましたが、皆様方には「私たちは違うのだ。彼らの暮らしはかわいそうだ」ということを決して思わないで欲しいと思います。日本の方が先進国で技術があって、私たちのほうが有利だということを思った途端に、目線がスラムなどの途上国で暮らしている人たちに対する上から目線になります。自分のほうがいいわと。私の方が上に立っているわ、というような気持ちになることが、一番怖い事じゃないかなと思います。私たちが持っている尺度で相手を決めつけることは絶対にしてはいけないことなのです。私たちは、例えばものがたくさんあって、蛇口をひねれば水が出て、スイッチひとつで電気がついて、ガスあり、テレビでは世界中の情報が見られる。途上国の暮らしでは、電気がないだけに家族の団らんの時間というのが長いのです。家族と過ごす時間も長いのです。みんな働かないと食べていけないから、家族の絆というのがものすごく強いです。お互いが思いやる暮らしをしています。たくさんの豊かさ、心の豊かさを持っているのです。

あちこち話が飛んでしまいましたけれども、今日呼んでくださいますてありがとうございます。質問ありますか？ご意見ありますか。よろ

マリ・クリスティーヌ

しいですか。何かありましたら、ぜひ望月先生を通してメールでも何でも結構ですので、ご意見を含めてよろしく願います。ご清聴ありがとうございました。